

概念の変形と理論の不幸

— G. H. ミードの generalized other を巡って —

山本 雄二

Deteriorating Concepts and Misfortune of the Theory:

Some Problems in Acceptance of "Generalized Other"

Concept by G. H. Mead in Japan

Yuji YAMAMOTO

Abstract

This study focuses on the concept of the "generalized other", which was introduced by George Herbert Mead. Although this concept is recognized as being important to the theory of the self, it is often explained based on misunderstanding of itself in Japan. "Generalized other" has been thought as taken by an individual person by mean of generalizing particular attitudes of other members; however Mead's text indicates that it is taken by each individual through one's direct experience of a social act with other members who have attitudes of their society as a whole. The author examines the characters of this misunderstanding by verifying Mead's text and, at the same time, indicates that it is inevitably accompanied with the ignorance of the fact that the experience of taking the "generalized other" is a physical experience, as well.

Keywords: G. H. Mead, generalized other, bodily experience

抄 録

G. H. ミードの generalized other の概念は自我論にとっては欠かせない概念であるにもかかわらず、わが国の社会学関係の事典や研究書には誤解に基づく説明と思われる記述がすくなくない。本稿はこの誤解の性格をミードの *Mind, Self, & Society* における generalized other の語用論的分析から明らかにする。さらにこの誤解と同じ前提、すなわち「一般化された他者」とは複数の他者が私に向ける態度や期待を一般化したものであるとの前提が翻訳書にもまた共有されていることを示す。以上の分析を通して新たに明らかになったのは、通俗的な説明においては「一般化された他者」の態度を個人が取り入れる契機となる社会的行為の身体性もまた同時に無視されているということである。

キーワード: G. H. ミード, 一般化された他者, 身体的経験

1. 検討すべき課題

理論は私たちにどのような現象に注目すべきかを指示し、何が意味あるデータであるか

を教え、さらにはデータのふるまいを読み解くための視角をも提供してくれる。教育社会学の領域ではB.バーンステインの言語コード論やP.ブルデューらの文化的再生産論および文化資本の概念などはその好例として記憶に新しい。

その一方で、より深い地平にあって、私たちの人間観や世界観そのものに触れるような性格をもつ理論(=パラダイム)は、新しいアプローチとして便利使いすることがむずかしいどころか、そもそもパラダイムの地平にあることが意識されているかどうかとも怪しい場合がある。そのような場合、当の理論は重要でないものとして周辺領域に捨て置かれるか、旧来からの手持ちの、かつ暗黙のパラダイムのなかに変形されて「理解」されることになる。その結果、理論はわけのわからないものになるか、わけはわかるが理論としてインパクトの感じられないものなるかといういずれにしても不幸な地位を与えられてしまうことになる。

本稿では、こうした躰きの一例としてG. H. ミードによる *generalized other* の概念を取り上げ、この概念がいかに変形された上で紹介されてきたか、またその変形によってミードの自我論から何が失われ、全体として理論がどのように変形したのかについて検討してみたい。

この *generalized other* の概念は主に *Mind, Self, & Society -from the Standpoint of a Social Behaviorist* で論じられている。講義録を基にミードの死後に編纂されたという原著は、そのことを含めて種々の理由からわかりづらいというのが定評になっているが、あなたがち理由のないことではない。人間形成、とくに社会の変革主体としての人間形成を論ずるに当たって、ミードは当時主流であった心理主義とワトソン流の行動主義とを相手に回して、あくまで社会的行動主義者であろうとする。そのため、観察可能な現象のみを記述する一方で、ちょうど理論物理学者が観察データや実験データを基に見ることのできない力や物質の存在を措定するのと同じように、直接には見ることのできない社会的プロセスを措定し、そこに精神の働きや自我と社会との関係を見ようとするからである。したがって、ミードの理論にとって本質的な部分は、社会的な意味ではたしかに実在するとされているにもかかわらず、どのひとつも直接的には見ることができない。“*generalized other*”、“*social act*”、“*I*”などはみなそうであって、およそミードの思想を語るときに不可欠な概念であるにもかかわらず、その説明がえてして間接的で、隔靴搔痒の感を抱かせるのはそのためである。そこに曲解が生まれる素地もある。

2. generalized other はどのように説明されてきたか

まずは現状において generalized other がどのように説明されているかを社会学関係の事典を中心にみておこう。

【現代社会学事典】（弘文堂：2012）の場合

簡易版でない最も新しい事典であるこの【現代社会学事典】では「一般化された他者」を次のように説明している。全文を引用する。

ミードによれば、個人は他者との相互作用を通じて、他者の役割を所得し、そのことを通じて、自分自身を対象化することができるようになる。その際、規範的なモデルとなり、その役割を取得すべき他者は、ある特定の他者であるだけでなく、一般化された他者という形式を帯びる。たとえば、野球で「四番打者」とか「投手」といった役割をこなすためには、「チーム全体」のことを考えなくてはならない。この「チーム全体」の立場にあたるのが、一般化された他者である。一般化された他者とは、このように、集団の全体の利害、意志、目的などに志向した規範的な他者のあり方である。一般化された他者の態度を取得することで、個人は、それぞれの集団のなかで自分がどのようにふるまうべきかを知ることになる。ミードによれば、個人の思考は、この一般化された他者と自己との間の内的な会話である。（大澤真幸）（p.56）

もっともオーソドックスな説明でもあり、要を得て簡潔である。同じ事典中の「自我／自己」の項目で浅野智彦が書いている説明も「一般化された他者」に関してはほぼ同様である。

【社会学事典】（丸善：2010）の場合

2010年に日本社会学会社会学事典刊行委員会による編集で発行された【社会学事典】では、「Iとme/役割取得——ミード」という大項目で「一般化された他者」を扱っている。その説明では、子どもの発達段階に沿ったかたちでミードの論を整理しなおした上で、他者の役割取得の意味を「ごっこ遊び」から「ゲーム」への移行という有名な例をあげて解説する。そして他者の役割取得の意義は「他者の視点」の獲得であると指摘して、「一般化された他者」について次のように書く。

〈他者の視点〉の取得には、さらにもう1つの意味がある。それは、子どもが他者の視点から自分に話しかけ、働きかけるようになることである。例えば野球などのゲームにおいて、子どもは、過去の経験と未来の予測を現在から再構成した「一般化された他者」の視点に立って、自分に話しかけ（内的会話）、複数の他者たちの態度を組織化する。この過程を経ることで、子どもは自我取得への道筋を歩き始める。（徳久美生子）（p.53）

この人の説明は全体として発達心理学的な枠組みを援用したものであり、その枠組みのなかで「一般化された他者」は現在から再構成された過去の経験と未来の予測であるとされている。もとより「一般化された他者」にそのような性質があることはミードのテキストでも指摘されており、事典の説明としてはかなり個性的であるとはいえ、否定される筋合いのものではないだろう。

問題は「『一般化された他者』の視点に立って、自分に話しかけ（内的会話）、複数の他者たちの態度を組織化する」の部分である。この表現は自家撞着に陥っていないだろうか。そもそも複数の他者たちの態度が組織されたものが「一般化された他者」の態度だったのではなかったか。そのことを踏まえた上で説明を見れば、「一般化された他者」の態度に至るにはあらかじめ「一般化された他者」の視点に立っていないかならという説明になり、おかしなことになってしまう。「一般化された他者」の視点に立つにはどのようにすればよいのか、また子どもはどのようにして複数の他者たちの態度を組織化するのだろうか、そしてその組織化の能力はどこから来るのだろうか。こうした疑問がただちに浮かんでくる。

同じ人が次の大項目「自我の社会性——ミード」も執筆しているので見ると、「一般化された他者」に関してはこう書かれている。「青年期に達する頃になると、人は行為がもつ意味を過去の経験や未来の予測を加味した『一般化された他者』の視点から捉え直し、社会的態度を組織化して自分の態度を決定する」（p.55）。この記述においても「一般化された他者」は「社会的態度を組織化」するための前提として扱われており、先の疑問は解消されないままである。してみると、どうやらこの自家撞着は執筆者がたまたま筆をすべらせたといったものではなさそうである。加えて、編集委員会の目を通っていることを考えれば、この種の説明がいわばミード理解のいわば定番として受け容れられている可能性もある。この点を確認する意味でも、この事典のおよそ20年前に刊行された『社会学事典』についても見ておこう。

【社会学事典】（弘文堂：1988）の場合

この事典の「一般化された他者」の項目にはこう書かれている。全文を引用する。

G. H. ミードの用語。社会的（問題）状況に慣習的に適用される、集団成員に共有された知覚＝行為の枠組み。成員全体の組織された行動パターンを表象している。この枠組みをもとに発揮される内省的自己意識を介して、諸行為が社会的にコントロールされていく。（安川一）（p.51）

じつに素っ気ない。すでにミードの理論に親しんでいる人がこの記述を見れば、なんらかの事情で必要にして最小限に切り詰めざるをえなかったのだと察することもできるだろうが、「一般化された他者」とはどのようなものかを知りたい人には何も説明していないのも同然である。

その代わり、「自我」の項目のほうで船津衛がより詳しく具体的に説明している。その項目のなかに「ミードの自我論」という節が設けられ、その一部にこう解説されている。

ミードによると、人間は他者の役割期待との関連において自我を形成する。子どもはまず、ごっこ遊びなどの「プレイ」段階において親や先生などの役割を演じることを通して自分のあり方を知るようになる。次に、野球やサッカーなど多くの人間とかかわる「ゲーム」段階において「一般化された他者」（generalized other）の期待との関連において自我が形づくられる。複数の他者の多様な期待をまとめ上げ組織化した「一般化された他者」の期待を取得することによって子供は十全な自我を発達させることができる。（船津衛）（p.350）

この説明によれば、「一般化された他者」の期待とは「複数の他者の多様な期待をまとめ上げ組織化した」ものなのであるが、では「まとめ上げ組織化」するのはだれなのか。その主体は子どもであるようにも読めるし、ゲームそのものにすでに複数の他者の期待が一般化されたかたちで含まれており、そのゲームに参加することによって子どもがその期待を取得するというふうにも読める。

船津の理解

執筆者の船津はこの点をどのように考えているのだろうか。【自我の社会理論】（船津：1983）での記述はこうなっている。

子どもは、初め、ごっこ遊びなどの「プレイ段階」において、父、母、友だち、先生などの「意味ある他者」(significant other)の態度を取得して自我を形づくる。そして、成長に伴い、もうひとつのタイプの役割取得による自我形成を行うようになる。子どもは次第に多くの他者と接触するようになる。複数の他者の態度は、しかし、多種多様である。それらに直面した場合、すべてに対して、同時に、同様に対応することができない。とりわけ、その間にズレや対立が存するコンフリクト状況においては、そのままでは役割取得は困難なものとなる。／そこで子どもは、普通、複数の他者の多様な態度を組織化し、一般化する。野球などの「ゲーム段階」において、子どもは、このような「一般化された他者」(generalized other)の期待を構成する。この「一般化された他者」の期待を取得することによって、自我を十全に発達させることができる。(p.12-13)

この説明では、複数の他者の多様な態度を組織化し、一般化し、「一般化された他者」の期待を構成するのは子どもであるとはっきり書かれている。もうひとつ、『社会学事典』(1988)の翌年に出版された『ミード自我論の研究』(船津：1989)ではどうか。第9章の「ミードの社会観と自我論(一)」での記述はこうなっている。

成長するにつれて、子供は多くの他者と結びつき、さまざまな期待を受けようになる。しかし、それらすべてを同時に同程度において受け入れることがむずかしい。しかも、その間に不一致や対立なども存在することがある。そのままでは混乱に陥り、葛藤を引き起こしてしまう。そこで、複数の他者の多様な期待を組織化し、一般化する必要がある。そこに、「一般化された他者」(generalized other)の期待が形づくられることになる。／野球などの「ゲーム遊び」において、子供はゲームに参加するすべての人間の期待を考慮に入れなければならない。一人や二人だけの期待を考えるのではゲームにうまく参加できない。そこで、子供は「一般化された他者」の期待を作り上げる。それはゲームのルールとなって具体的に現れている。ゲームのルールを身につけることによって、子供はゲーム遊びの楽しさを味わえるようになる。ミードは、この段階を「ゲーム」段階と呼ぶ。「ゲーム」段階において、子供は「一般化された他者」の期待を取得することによって十全な自我を発達させるようになる。(p.111)

さらに第10章「ミードの社会観と自我論（二）」でも、上記とほとんどまったく同じ内容が繰り返される。ただ異なるのは次の一文が付け加えられていることである。「ゲームにおける『一般化された他者』はチームのメンバー全員であり、『一般化された他者』はゲームのルールとして表される」（p.130）。いずれにしても複数の他者の多様な期待を組織化し、一般化するのは子ども自身であり、『一般化された他者』の期待を作り上げるのは子どもであると主張されているのは同じである。

こうしてみると、この人の「一般化された他者」に関する理解は終始一貫しており、複数の他者の態度を組織化し、一般化する主体は子どもであり、『一般化された他者』の期待を作り上げるのも子どもである。一貫しているのは、一般化の主体が子どもであるという点にとどまらない。子どもが他者の態度を一般化しなければならない理由もまた一貫している。引用の繰り返しになるが、その理由とは「成長するにつれて、子供は多くの他者と結びつき、さまざまな期待を受けるようになる。しかし、それらすべてを同時に同程度において受け入れることがむずかしい。しかも、その間に不一致や対立なども存在することがある。そのままでは混乱に陥り、葛藤を引き起こしてしまう。そこで、複数の他者の多様な期待を組織化し、一般化する必要がある」からである。『社会学事典』（弘文堂：1988）の記述も当然ながらこの理解に基づいている。そして、この理解は1997年に刊行された『G. H. ミードの世界——ミード研究の最前線——』（恒星社厚生閣）に執筆した「ミードの自我論」においてもまったく変わっていない。

疑問

だが、そうであれば先に『社会学事典』（丸善：2010）の場合に生じた疑問はさらに膨らみ、さらに先鋭化したものとならざるをえない。先の疑問は基本的には「一般化された他者」の態度に至るにはあらかじめ「一般化された他者」の視点に立っていないからという論理構造の自家撞着に関するものであったが、船津の理解に対する疑問はもっと具体的である。船津によれば、子どもが「一般化された他者」の期待を作り出さなければならないのは、多くの他者と結びつき、さまざまな期待を受けようになると、複数の他者の期待の間には不一致や対立などがあって子どもは混乱してしまう。そこで複数の他者の多様な期待を組織化し、一般化して「一般化された他者」の期待にまとめ上げるのだという。であれば、子どもはどのようにして複数の他者の期待の間にある不一致や対立を組織化し、一般化するのだろうか。そのような能力はどこからやってきたのだろうか。そもそも不一致や対立を組織化し、一般化するとはどのようなことを言うのだろうか。どのよう

な状態になれば不一致や対立が組織化され、一般化されたことになるのか。

この最後の疑問を念頭に置いたものかどうか、『ミード自我論の研究』（1989）では「それはゲームのルールとなって具体的に現れている。ゲームのルールを身につけることによって、子供はゲーム遊びの楽しさを味わえるようになる」（p.111）とか「『一般化された他者』はチームのメンバー全員であり、『一般化された他者』はゲームのルールとして表される」（p.130）という表現が追加されている。たしかにミードのテキストでも、「一般化された他者」はルールであると表現されていたり、チームプレーの場合に「一般化された他者」の態度はチームのメンバー全員の態度であると表現されたりしており、「一般化された他者」の意味を具体的に理解する助けになっている。

しかし、船津の文脈にゲームのルールやチーム全体の態度を置いた場合、理解を助けるどころか、混乱はますますひどくなるばかりである。なぜなら、「一般化された他者」の具体例としてのルールやチーム全体の態度は、そのゲームや社会的交流プロセスに参加する特定個人の意志で自由になるような性質のものではないからである。野球の場合でも、他のメンバーから多様な期待を受けているため、混乱を避けるために複数の多様な期待を組織化し、一般化して「一般化された他者」としてのルールを作り上げたわけではない。特定個人は野球というすでにルールの備わったゲームに参加するのであって、特定個人がゲームに参加しながら混乱してしまってルールを作り上げるわけではないのだ。他者の態度を組織化し、一般化する主体としての子どもを想定することと、「一般化された他者」の具体例としてゲームのルールやチーム全体を持ち出してくることとは両立しないのである。

プロセスへの関心

『社会学事典』（丸善：2010）における徳久の説明と『社会学事典』（弘文堂：1988）の説明の共通点はそのどちらもが自我論の文脈での説明であるという点である。自我論であるかぎり、自我形成プロセスに触れないわけにはいかない。言い換えれば、「一般化された他者」がどのようにして個人によって取り込まれるのかについて説明しないわけにはいかないのだ。ところが、ミードのテキストはどのようなプロセスで「一般化された他者」が取り込まれるのかについては読者の解釈に委ねてしまっているようなところがある。すくなくとも現代の私たちにはそのよう印象を与える。

そこで解釈を委ねられた読者として、徳久も船津も個人にある特定の能力を措定し、その能力によって「一般化された他者」を作り上げるものと考えたのであろう。しかし、その点こそ、ミードが決して陥ってはならないと自戒していたことでもあり、ぜひとも反駁

しておかなければならないことであった。プロセスに関心を向けるあまり、いきおい生得的な特殊能力論や主観的構成論に足をすくわれることになってしまっただけで元も子もない。こうした特殊能力論や主観的構成論はときに耳に心地よく聞こえるために、ともすると説明の溝を埋めるために自覚されないまま密輸入されることがあるが、そうした所作は同時にミードの思想を骨抜きにすることでもある。

もちろん、ミードは「一般化された他者」が個人に取り込まれるプロセスを無視しているわけではない。むしろしつこいほどに説明を試みていると言ってもよいくらいだ。その点を考察する準備として、まずは実際にミードのテキストにおいて *generalized other* がどのような使われ方をしているのかをたしかめておきたい。

3. *generalized other* の語用論

検証にもちいるのは Mead, G. H., *Mind, Self, & Society -from the Standpoint of a Social Behaviorist*, ed. by Charles W. Morris, The University of Chicago Press, 1962 (originally 1934) であり、対象とするのは便宜的にこの本の Part III. The Self の部分、章で言えば第18章から29章までの12章分とする。*generalized other* のことばがこの部分でもっとも多く使われているのに加えて、自我形成との関係もまたこの部分でもっとも詳細に論じられているからである。

3-1 *generalized other* の用法

Part III The Self の全12章のなかに、*generalize* という単語は変化形を含めて全部で30箇所使われている。そのうち章タイトルに含まれているケースを除くと29箇所。脚注のなかでもちいられているものも含めて、29箇所の使われ方による内訳を見ると、まず受動態での形容詞的用法が26箇所ある。具体的には以下のような使われ方をしている。

generalized other : 20

generalized attitude : 4

generalized stand point : 1

generalized family attitude : 1

そのほかに、能動態での用法は3箇所であり、そのうち過去形が1箇所、目的語（句）を伴う動名詞形での用法が2箇所である。そのすべてを、文脈もある程度わかるように引用し、簡単な要旨をつけたものを以下に示す。

3-2 受動態の用例

(1) The individual experiences himself as such, not directly, but only indirectly, from the particular standpoints of other individual members of the same social group, or from the **generalized standpoint of the social group as a whole** to which he belongs. (p.138)

(要旨) 1行目の *as such* が意味しているのは、個人が自分自身の対象になるということ、そのためには個人を超えた客観的な態度で自分自身に向き合う必要があるということである。ここで言われている個人を超えた客観的な観点や立場が *generalized standpoint of the social group as a whole to which he belongs* である。この観点は *the particular standpoints of other individual members of the same social group* の言い換えでもある。*the particular standpoints* と限定をつけているのは、単に個人に向けられた他者の態度ではないとの含みである。

(2) The organized community or social group which gives to the individual his unity of self may be called "the **generalized other.**" The attitude of the **generalized other** is the attitude of the whole community. (Thus, for example, in the case of such a social group as a ball team, the team is the **generalized other** in so far as it enters — as an organized process or social activity — into the experience of any one of the individual members of it. (p.154)

(要旨) ここでは「一般化された他者」の機能を述べている。個人に自我としてのまとまりを与える機能を果たすような共同体や社会集団が「一般化された他者」であるとされる。また野球チームのような社会集団の場合、そのチームが「一般化された他者」であるときにメンバーはチームのメンバーとしての自覚も持てるし、チームプレーもできるという。

(3) It is possible for inanimate objects, no less than for other human organisms, to form parts of the **generalized and organized — the completely socialized - other** for any given human individual, in so far as he responds to such objects socially or in a social fashion (by means of the mechanism of thought, the internalized conversation of gestures). Any thing — any object or set of objects, whether animate or inanimate, human or animal, or merely physical — toward which he acts, or to which he responds, socially, is an element in what for him is the **generalized other**; by taking

the attitudes of which toward himself he become conscious of himself as an object or individual, and thus develops a self or personality. (p.154 脚注) ……（このすぐ上の文章にある **generalized other** への注である）

（要旨） 生物であるとないとを問わず、個人がその対象に対して社会的なやり方で反応するかぎりにおいてすべてが「一般化された他者」の要素になりうるという。ここで「社会的なやり方」とはその反応が社会に埋め込まれており、その反応が社会的行為の要素となるという意味である。補足的すれば、例として信号機を思い浮かべればよい。信号機自体は人ではないが、信号機にどのように反応すべきであるかは社会に埋め込まれており、その信号機にしたがう行動は、その行動を要素とする社会的行為を形成しており、その行為には信号機を見る他のすべての人の反応が含意されている。機能としては、自分に向けられた一般化された他者の態度を取り入れることで、人は自分自身をひとつの対象あるいは個人として意識するようになり、自我や人格を発達させてゆくことされる。

(4) Thus, for example, the cult, in its primitive form, is merely the social embodiment of the relation between the given social group or community and its physical environment – an organized social means adopted by the individual members of that group or community, of entering into social relations with that environment, or (in a sense) of carrying on conversations with it; and in this way that environment becomes part of the total **generalized other** for each of the individual members of the given social group or community. (p.154 脚注)

（要旨） 上の注の続き。物理的環境もまた「一般化された他者」の構成要素となりうるという。その例として原初的形態の祭儀をあげている。祭儀とは集団なり共同体なりの個々のメンバーが環境と対話するために採用した組織的手段であるとされている。

(5) It is in the form of the **generalized other** that the social process influences the behavior of the individuals involved in it and carrying it on, i.e., that the community exercises control over the conduct of its individual members; for it is in this form that the social process or community enters as a determining factor into the individual's thinking. (p.155)

（要旨） 「一般化された他者」というかたちで共同体は個々の成員の行動に支配力を行使し、個人の思考の中にその思考の決定要因として入り込んでくるという。「一般化された他

者」の機能を述べている。

(6) We have said that the internal conversation of the individual with himself in terms of words or significant gestures — the conversation which constitutes the process or activity of thinking — is carried on by the individual from the standpoint of the “**generalized other**.” And the more abstract that conversation is, the more abstract thinking happens to be, the further removed is the **generalized other** from any connection with particular individuals. It is especially in abstract thinking, that is to say, that the conversation involved is carried on by the individual with the **generalized other**, rather than with any particular individuals. (p.155脚注)

(要旨) 個人の内面で自分自身と行われる会話は多かれ少なかれ「一般化された他者」の立場に立っているものでなければならず、その会話＝思考が抽象度を増すほどに内的な会話の相手は特定の個人との結びつきがより弱い「一般化された他者」とのものになる。文中3箇所の **generalized other** はどれも同じ意味である。

(7) In abstract thought the individual takes the attitude of the **generalized other** toward himself, without reference to its expression in any particular other individuals; and in concrete thought he takes that attitude in so far as it is expressed in the attitudes toward his behavior of those other individuals with whom he is involved in the given social situation or act. (pp.155-156)

(要旨) 思考はどのようなものであれ、「一般化された他者」との会話である。その上で、ミードは思考を具体的な思考と抽象的な思考とに二分し、具体的な思考の際には他の個人の態度の中に表現されている「一般化された他者」との会話であり、抽象的な思考の際の「一般化された他者」は他の特定個人の態度にどのように表現されているかということとは関係のない「一般化された他者」であるという。ただし、「一般化された他者」に二種類あるというのではなく、いったん取り入れられた「一般化された他者」は、具体的な個人を離れてもお内的な会話の相手となりうることを言っている。

(8) But only by taking the attitude of the **generalized other** toward himself, in one or another of these ways, can he think at all; for only thus can thinking — or the internalized conversation of gestures which constitutes thinking — occur. And only

through the taking by individuals of the attitude or attitudes of the **generalized other** toward themselves is the existence of a universe of discourse, as that system of common or social meanings which thinking presupposes at its context, rendered possible. (p.156)

（要旨）ここでは上で述べられたこと（思考は「一般化された他者」との会話である）をさらに発展させ、「一般化された他者」が社会の成員にあまねく取り入れられている場合に、言説世界が存在しうるのだという。言説世界とは社会的な意味システムのことであり、思考はこの意味システムがあって初めて可能になる。

(9) Thus it is, for example, that abstract concepts are concepts stated in terms of the attitudes of the entire social group or community; they are stated on the basis of the individual's consciousness of the attitudes of the **generalized other** toward them, as a result of his taking these attitudes of the **generalized other** and then responding to them. And thus it is also that abstract propositions are stated in a form which anyone — any other intelligent individual — will accept. (p.156脚注)

（要旨）抽象的な概念は共同体全体の態度の観点から述べられた概念のことであるという。言い換えれば、個人が取り入れた「一般化された他者」とのやりとりの結果が抽象的な概念であり、抽象的でありながらその概念が他者と共有できるのも「一般化された他者」が分かち持たれているからである。

(10) But at the second stage in the full development of the individual's self that self is constituted not only by an organization of these particular individual attitude, but also by an organization of the social attitudes of the **generalized other** or the **social group as a whole** to which he belongs. (p.158)

（要旨）自我の十全な発達にいたる第二段階にあつては、その自我はこのような特定個人の態度の集合体によって構成されているだけでなく、「一般化された他者」の社会的態度とか個人が所属する社会集団全体としての態度によってもまた構成されている。

(11) In the game we get an organized other, a **generalized other**, which is found in the nature of the child itself, and finds its expression in the immediate experience of the child. And it is that organized activity in the child's own nature controlling the

particular response which gives unity, and which builds up his own self. (p.160)

(要旨) ゲームにおいて子どもは「一般化された他者」を取り入れ、そのことによって子どものふるまいには組織的な活動の側面が備わるようになり、さらには自分の反応をコントロールし、反応に統一性を与え、子ども自身の自我を構築することにもなるという。「一般化された他者」の自我形成機能を表現したもの。

(12) Those attitudes (as organized sets of responses) must be there on the part of all, so that when one says such a thing he calls out in himself the response of the others. He is calling out the response of what I have called a **generalized other**. (p.161)

(要旨) 「一般化された他者」が社会の成員に分かち持たれていることを前提にしなければ、何かの主張によって、他者のうちに呼び起こす反応を自分のうちにも呼び起こすなどということはできない。この認識はやがて意味あるシンボルによるコミュニケーション論へとつながってゆく。

(13) They give him what we term his principles, the acknowledged attitudes of all members of the community toward what are the values of that community. He is putting himself in the place of the **generalized other**, which represents the organized responses of all the members of the group. (p.162)

(要旨) 「一般化された他者」の態度とは共同体の価値とされているものを追い求める全成員の態度、共同体によって認められた態度であり、個人がそのような態度を取ることができるようになるとき、その個人は「一般化された他者」に近づいていると言える。社会の価値観を表すものとしての「一般化された他者」。

(14) It is good for both to think out the situation in advance. Each individual has to take also the attitude of the community, the **generalized attitude**. He has to be ready to act with reference to his own conditions just as any individual in the community would act. (p.167)

(要旨) コミュニケーションをスムーズに行うためにも、また社会の成員としての務めを果たすためにも人は共同体の態度、すなわち、一般化された態度を取り入れていなければならない。

(15) We both get the object and ourselves into experience in terms of such a process; the other appears in our own experience in so far as we do take such an **organized and generalized attitude**. (p.195)

（要旨） 他者が私たち自身の経験の中に姿を現すためには、組織的で一般化された態度が取り入れられているのでなくてはならないという。

(16) If one meets a person on the street whom he fails to recognize, one's reaction toward him is that toward any other who is a member of the same community. He is the other, the **organized, generalized other**, if you like. (p.196)

（要旨） 道で出会った人が誰であるか思い出せないようなとき、そのときの態度はごく一般的なものにならざるをえない。その態度が対象としているのが「一般化された他者」であるという。

(17) The genius, like the ordinary individual, comes back at himself from the standpoint of the organized social group to which he belongs, and the attitudes of that group toward any given project in which he becomes involved; and he responds to this **generalized attitude of the group** with a definite attitude of his own toward the given project, just as the ordinary individual does. (p.216脚注)

（要旨） 普通の人も天才もあるプロジェクトに対しては独自の態度を持っており、かつ所属する集団総体の態度がどのようなものであるかによって自分の立ち位置を計るのだという。

(18) But this definite attitude of his own with which he responds to the **generalized attitude of the group** is unique and original in the case of the genius, whereas it is not so in the case of the ordinary individual; (p.216脚注)

（要旨） 上の続き。天才が異なるのは集団総体の態度に反応するその態度が独特である点であるという。

3-3 能動態の用例

(19) He must also, in the same way that he takes the attitudes of other individuals toward himself and toward one another, take their attitudes toward the various phases or aspects of the common social activity or set of social undertakings in which, as

members of an organized society or social group, they are all engaged; and he must then, by **generalizing** these individual attitudes of that organized society or social group itself, as a whole, act toward different social projects which at any given time it is carrying out, or toward the various larger phases of the general social process which constitutes its life and of which these projects are specific manifestations. (p.155)

(要旨) generalize の目的語は these individual attitudes of that organized society or social group itself である。自我を最大限に発達させるためには他者の特定個人に対する態度を取り込むだけでは不十分であり、組織された社会の成員が共通に取り組んでいる社会的事業への態度もまた取り込まなくてはならないというわけである。その際の取り込み方は他の特定個人に対する態度を取り込むのと同じであり、ここに抽象化のプロセスは含意されていない。というのも、ここで取り入れられる態度は始めから社会活動や社会的な取り組みにかかわっている他者の態度だからである。この態度を他の社会的プロジェクトやより大きな局面にも向けることが generalize の意味である。

(20) These social or group attitudes are brought within the individual's field of direct experience, and are included as elements in the structure or constitution of his self, in the same way that the attitudes of particular other individuals are; and the individual arrives at them, or succeeds in taking them, by means of further organizing, and then **generalizing**, the attitudes of particular other individuals in terms of their organized social bearings and implications. (p.158)

(要旨) 上の例と同様、能動態の動名詞形。目的語は the attitudes of particular other individuals である。複数の人の態度を organize したり generalize したりする際によりどころになるのが their organized social bearings and implications であるという。「特定他者の態度の中に含まれる組織的で、社会的な性質や意味合い」というところか。そうした「性質や意味合い」はすでに organized された状態で社会的な事業に取り組んでいる他者の態度のなかに表現されている。そして、すでに organized された「性質や意味合い」を受け取るのは「特定の他者の態度が組み込まれるのと同じである」と述べる。その取り込みのプロセスが1～2行目に書かれており、社会や集団の態度は直接的な経験というかたちで個人の領域に持ち込まれ、自我構造の要素となるという。

(21) Jesus **generalized** the conception of the community in terms of the family in such a statement as that of the neighbor in the parables. Even the man outside of the community will now take that **generalized family attitude** toward it, and he makes those that are so brought into relationship with him members of the community to which he belongs, the community of a universal religion. (p.216)

（要旨） イエスが家族概念を隣人にまで拡張したことを受けて、このようなやりかたで拡張してゆけば、やがてすべての人を家族のように同じ共同体のメンバーとして接しうようになるという例である。この場合、「拡張された家族的態度」あるいは「家族的態度の拡大適用」が **generalized family attitude** であり、なんらかの抽象化プロセスを含むものではない。すなわち、個別の family attitudes から共通項を抽出して一般的な態度に到達したというようなものではないし、この文で言われている概念の拡張にしても、そもそもイエスが行ったからといって一般の人間にもできるということにはならない。

3-4 用例のまとめ

上で見た generalize の用法を簡単にまとめておく。まず受動態の用法としては、自我形成の必要条件として取り入れられなければならないものとしての **generalized other** であり（用例1）、取り入れられた **generalized other** は自我にまとまりを与え、集団成員としての自覚を与えるだけでなく、**generalized other** のおかげで個人は組織的な活動もできるようになるという（用例2）。同じことをプレイとゲームの例で説明したのが（用例10）と（用例11）。（用例14）（用例15）も基本的には同じことを言っている。

generalized other の構成要素は無機物や自然環境であることもある。その対象への反応が社会に埋め込まれているならあらゆるものが **generalized other** の構成要素となりうることが示される（用例3）（用例4）。また **generalized other** の機能としては、個人の行動を統制する役割を果たし、思考の決定要因ともなる（用例5）。思考とは内面における **generalized other** との対話であり（用例6）、**generalized other** の抽象度の程度に応じて思考の抽象度も変化するとされる（用例7）。さらに拡大して、**generalized other** が社会の成員にあまねく共有されている場合に言説世界＝社会的な意味システムが成立し、思考はこの意味システムがあって初めて可能になる（用例8）。所有権のような抽象的な概念が可能なのも **generalized other** が社会によって共有され、反応が社会に埋め込まれているからである（用例9）（用例12）。そのことは価値観についても同様である（用例13）。（用例16）は卑近な例として。

(用例17)(用例18)は天才について述べる。天才の独自性は集団の *generalized attitude* に対する反応の独自性であるとされる。なお *generalized attitude* と個性との関係についてしばしば対立するものと誤解されているようであるから、若干補足しておく。この天才を大天才・中天才・小天才・やや天才などとレベルに分け、さらに A 方面の天才、B 方面の天才などと分けてゆけば、天才の数は無限に多くなることになり、事実上、個性と言い換えてもよいものになる。このことだけからしても *generalized attitude* は個性と両立しないどころか、反対に個性にとっての必要条件であると主張されていることがわかる。

いずれにしろ、ミードのテキストに忠実であるかぎり、*generalized other* も *generalized attitude* も *generalized standpoint* も個人にとってはすでに *generalize* されたものとして現れ、経験されることが見て取れる。特定の他者や特定の態度や特定の立場を数多く経験するうちに混乱してしまうので *generalize* するというような記述はどこにもない。どこにもないどころか、*generalized other* が直接に個人の経験領域に入ってくるという点こそがプラグマティストのミードにとっての要石である点は確認しておいてもよいかもしれない。

さて問題となるのは能動態の用法についてであろう。(21)の例はイエスが家族概念を拡張する話であり、世界宗教の態度を説明する際には重要な出発点であるが、本稿の議論には直接かわからないことからここでの考察からはひとまず外しておくのが適当だろう。問題は(19)と(20)の用例である。*generalize* の目的語は、(19)の用例では *these individual attitudes of that organized society or social group itself* であり、(20)の用例では *the attitudes of particular other individuals* である。どちらも他の個人の態度を *generalize* すると書かれているから、いきおい自分に向けられた特定他者の態度を個人が抽象化し、その結果得られるのが *generalized attitudes* であると早合点してしまうのかもしれない。

しかし、自分に向けられた特定他者の態度をいくら積み重ねても *generalized attitudes* にはならない。そもそも自分に向けられた特定他者の態度を受け取る経験と *generalized attitudes* に触れる経験とは経験の次元が異なるからである。*generalized attitudes* を取り入れることができるのは、(19)の用例にあるように、社会的なプロジェクトに取り組む他者の態度に触れることによるほかはなく、触れるためにはそのような他者と経験をともにする以外にはない。そうして取り入れた態度を *generalize* するとは、(19)の要約中にすでに指摘したように、今度は自分がその態度で他のプロジェクトやより大きな局面に臨むことができるようにすること、すなわちその態度を普遍性のあるものとして受け取ることを意味している。そのかぎり(19)の用例中の *generalize* は(21)のイエスの例とも通じあ

ている。つまり、generalize の目的語となっている these individual attitudes of that organized society or social group itself は自分に向けられた特定他者の態度のことではなく、common social activity や set of social undertakings にかかわっている成員の generalized attitudes そのものなのである。もしこの generalize に『社会学事典』（弘文堂：1988）が言うような意味での「一般化」ということばを当てるとしたら、すでに一般化された態度を一般化するというわけのわからないことになってしまう。

では(20)の用例はどうか。この用例における generalize の目的語である the attitudes of particular other individuals は自分に向けられた特定他者の態度を表している。しかし、この場合もまた自分に向けられた特定他者の態度を抽象化して「一般化された他者」に到達するという意味で「一般化する」のではない。もしそうなら、同じパラグラフにある「社会や集団の態度は直接的な経験というかたちで個人の領域に持ち込まれ、自我構造の要素となる」という表現と矛盾するし、その取り込まれかたを表している「特定の他者の態度が組み込まれるのと同じである」の表現とも矛盾する。ここにはなんらの抽象化能力も前提とされていないし、取り込まれるプロセスにおいても抽象化のプロセスは含まれていない。

この部分は自我の発達段階を説明するのに引き合いに出されたプレイとゲームの例を受けて展開されているのであるが、自我発達の第一段階であるプレイの段階で個人に取り込まれるのは自分に向けられた特定他者の態度のみである。その状態からやがて、成員の行動が互いにすべて他の成員の行動と結びついているような組織的なゲームに参加するようになると、個人はそれまでとは違う generalized other に向き合うことになり、generalized other の態度を取り入れ、その態度に反応することが要求されるようになる。generalize はこのような意味で使われている。なんらかの抽象化プロセスを経て一般化されるのではなく、プレイ段階ですでに取り入れられている「自分に向けられた特定他者の態度」を「一般化された他者の態度」によって「上書きする」こと、そのことによって取り入れられた他者の態度はより一般性を持ったものになり、自我もより社会性を持ったものになるというのが generalize の意味するところである。organize も同様であり、上と同じプロセスを経ることで、取り入れられた他者の態度がより組織的なものになることを意味している。

この節で行った用法の検証とわずかな考察によっても generalized other の概念がいかにゆがめられたかたちで紹介されてきたかがわかるし、またそのことによってミードの理論もまたかなり変質したものになっているであろうことは容易に想像できる。generalized other の概念はこれまであまりにも当たり前のように受けとめられており、あえて「常識的な」

理解を批判的に再検討する研究はほとんどないと言ってもよいが、そうした「常識」を形成するのに大きな役割を果たしてきたのが翻訳書の存在であったろう。次節ではこの翻訳書の問題に簡単に触れておきたい。

4. 翻訳と理論の問題

G. H. ミードの *Mind, Self, & Society -from the Standpoint of a Social Behaviorist* は三隅一成によって早くも1941年に白揚社から『行動主義心理学』（世界全體主義体系）として刊行されている。この訳書は訳者自身がミードのもとで研究生活を送っていたこともあって、ミードの思想には相当程度通じていたと思われるのであるが、いかんせん文体が古めかしく、現代においてはほとんど忘れ去られた訳書であると言ってもよいだろう。

現代において G. H. ミードの思想を知ろうとする人が手にするのはおそらく1973年刊行の稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳による『精神・自我・社会』（青木書店・現代社会学大系）か、1995年に刊行された河村望訳の『精神・自我・社会』（人間の科学社）ということになろう。この両者は訳を巡ってしばしば論争を行っているが、その点はひとまず置いておくことにして、ここでは長らくミード訳の定番として参照されてきた青木書店版のほうを見ておきたい。

4-1 organize, organization

取り上げる箇所は上の用例(10)の部分である。該当箇所の訳文は次のようになっている。

ところで、自我の十全な発達にはふたつの一般的段階があることを、先に指摘しておいた。その第一段階では、ある個人の自我は、かれが他の個人たちといっしょに参加している特定の社会的動作（アクト）に、他の個人たちがかれにたいして、およびたがいのあいだで特殊な態度を(a)組織化することだけで形成される。ところが自我の十全な発達の第二段階だと、自我は、こういう特殊な個人的態度の(b)組織化によってだけでなく、一般化された他者で、またはかれが属している社会集団全体の社会的態度の(c)組織化で、形成される。(A)この社会的態度もしくは集団の態度も、特殊な他の個人たちの態度のばあいとおなじやり方で、個人的な直接経験の場にもちこまれ、かれの自我の構造や基本構成の要素として包含される。そして個人は、特殊な他の個人たちの(d)組織化された社会的関係（ベアリング）[相互的な位置づけ] やからみあ

い（インプリケーション）を通して、かれらの態度をいっそう(e)組織化し、その上で一般化することによって、それ〔一般化された他者の社会的態度〕に到達するし、それを採用することにも成功する。こうして自我は、こういう他者の個人的態度を(f)組織化された社会的態度、もしくは集団の態度へと(g)組織化することで、その十全な発達を達成する。また、個人や他者がすべてふくまれている社会的行動もしくは集団の行動についての一般的で体系的なパターンを個人として反映することで達成する。そのパターンは、(B)ある個人が他者たちの個人的態度を採用するのとまったく同様に、かれが自分の中枢神経系のメカニズムを通して、自分自身にたいして採用する(h)組織化された集団的態度を媒介にして、個人の経験のなかにひとつの全体としてはいりこんでくるものである。（訳書 p.169：文中の下線と下波線、およびアルファベット記号は筆者による。また文中の（ ）と〔 〕は訳者が注としてつけたもの。）

この部分は自我の発達段階の違いをまとめて表現している箇所、「ごっこ遊び」に典型的なプレイ段階とボールボールを引き合いに説明されるゲーム段階での自我構造がどのように異なり、またどのように同じなのかを説明している。この訳文は全体としても何を言っているのかわかりにくい、とくにわかりにくいのは第一段階と第二段階における自我の形成プロセスが、下線部(A)(B)で「同じである」と強調されているにもかかわらず、どのように同じなのかははっきりしない点である。まずは「組織化」ということばに注目してみよう。

この訳文には「組織化」ということばが8箇所使われている。そのうち(d)(f)(h)は社会的態度や集団的態度の状態を表しており、具体的には法律や慣習や道徳というかたちで社会に組み込まれている状態を示している。残りの5箇所は他動詞「組織化する」の変化であり、まず(a)をほぐして表現すれば、「他の個人たち」が「かれおよびたがい」に対して「特殊な態度」を「特定の社会的動作」に「組織化する」ことで、「個人の自我」は「形成される」となる。(b)も用法としては同じである。いずれにしても日本語として意味不明であり、とくに「特殊な態度」を「特定の社会的動作」に「組織化する」とはどういうことを言っているのかわからない。しかも、「組織化する」のは「他の個人たち」であるというのであるから混乱はますます大きくなる。

(c)は自我の第二段階の話で、「一般化された他者」で「個人の自我」は「形成される」、あるいは「社会集団全体の社会的態度」の「組織化」されたもので「個人の自我」は「形成される」とされる。「一般化された他者」と「社会集団全体の社会的態度」が「組織化」

されたもの」とは同じ内容を表しているはずであるから、「一般化された他者」とは「社会集団全体の社会的態度」が「組織化」されたものとみなされていることになる。(e)と(g)の用法は、「特殊な他の個人たちの態度」を「組織化」することで「一般化された他者」に到達することができ、「他者の個人的態度」を「社会的態度」に「組織化」することで「自我」は「発達する」ことができるというように使われている。(e)と(g)では、「一般化された他者」に到達するためには「他者の個人的態度」を「組織化」しなければならず、(c)では「一般化された他者」をさらに「組織化」したものが「社会的態度」であるとされ、自我の発達のためには何段階もの「組織化」のプロセスを経なければならないことになっている。

(a)(b)は意味不明なので検討から除外して、(c)(e)(g)から判断すると、自我形成における第一段階と第二段階の違いは、第一段階では「特殊な他の個人たちの態度」が単純に「組織化」されて取り入れられるのに対して、第二段階では何重にも「組織化」されて取り入れられる点にあることになるだろう。この説明は段階の違いによって取り入れられるプロセスがいかにか違っているかの説明である。しかも、この「組織化」のプロセスがなんらかの知的操作を意味しているのなら、3節の用例(6)(7)(8)で強調されていることと矛盾することになる。すなわち用例では、思考とは「一般化された他者」との対話であり、したがって「一般化された他者」が取り入れられていることは思考の前提条件だからである。

同じ点があるとしたら文中(A)の「おなじやり方で、個人的な直接経験の場にもちこまれ」の部分しかないが、プロセスがこんなにも違うように書かれていてはとても「おなじやり方で」取り入れられているとは言えないし、また社会的態度の取り入れられかたがこんなにも複雑なプロセスとして説明された上で、「直接経験の場にもちこまれる」と言われても混乱するばかりである。どこにつまずきの元があるのだろうか。この箇所の内容を見よう。

I have pointed out, then, that there are two general stages in the full development of the self. At the first of these stages, the individual's self is constituted simply by (a) an organization of the particular attitudes of other individuals, toward himself and toward one another in the specific social acts in which he participates with them. But at the second stage in the full development of the individual's self that self is constituted not only by (b) an organization of these particular individual attitudes, but also by (c) an organization of the social attitudes of the generalized

other or the social group as a whole to which he belongs. These social or group attitudes are brought within the individual's field of direct experience, and are included as elements in the structure or constitution of his self, in the same way that the attitudes of particular other individuals are; and the individual arrives at them, or succeeds in taking them, by means of further (e) organizing, and then generalizing, the attitudes of particular other individuals in terms of their (d) organized social bearings and implications. So the self reaches its full development by (g) organizing these individual attitudes of others into the (f) organized social or group attitudes, and by thus becoming an individual reflection of the general systematic pattern of social or group behavior in which it and the others are all involved - a pattern which enters as a whole into the individual's experience in terms of these (h) organized group attitudes which, through the mechanism of his central nervous system, he takes toward himself, just as he takes the individual attitudes of others. (p.158: 訳文でのアルファベット記号と下波線に該当するところに同じ記号と下波線をつけた。そのため訳文での出現順とは前後している箇所がある。)

一見して気がつくのは、(a)(b)(c)の organization が訳文ではいずれも他動詞として訳されている点である。たしかに翻訳の技法として、名詞を動詞的に訳すとわかりやすくなるケースがあるが、この場合は the particular attitudes of other individuals, toward himself and toward one another が社会的行為のなかで経験され、取り入れられて自我の構成要素となっている状態を表しているのもあって、だれかが「組織化する」のを名詞形で表現したものではない。加えて第二段階でも、内容は異なるけれども、the social attitudes of the generalized other or the social group as a whole が社会的行為のなかで経験され、取り入れられて自我の構成要素となるというのである。その両方ともが個人の直接的経験の領域に持ち込まれた結果であるというわけだ。直接的経験の領域とはすなわち他者とともに当の個人が含まれる社会的行為の経験領域である。この点が共通点である。

では(e)(g)の organizing はどうか。organize の目的語はそれぞれ the attitudes of particular other individuals と these individual attitudes of others であり、その意味はそれぞれをより発達した自我の構成要素に組み替えるということである。そのため組み替えと同時に自我はより発達したものになっていなければならない、その発達に寄与するのが、

前者においては their organized social bearings and implications であり、後者においては the organized social or group attitudes なのである。ここには「組織化する」というような知的操作は想定されておらず、必要なのは、全体としての共同体の態度を経験することであり、他者ととともに共同体を志向した社会的行為を経験することである。第一段階との違いはこの点にある。

このように自我発達の第一段階と第二段階における同一性と相違点を見きわめておけば、難解と言われるミードの翻訳もずっと筋の通りがよくなるだろう。ある社会における通念に疑問を突きつけ、発想の根本的な転換を要求するような要素を含む理論の場合、辞書を頼りに原語を機械的に日本語に置き換えてゆけば理解可能なものになるはずだというのはどうやら誤解のようである。そのことはこの例を見るだけでもわかる。英語を日本語にするプロセスで先入観はいくらでも入りうるし、そのことによっていくらでも元の内容とは違うものになりうるのである。この例でも、他者の態度を個人が「組織化」して「社会的態度」や「一般化された他者」に到達するという2節で見た事典のつまずきと同種の発想が元になっているようである。

4-2 身体の問題

例文の最後の文に含まれる through the mechanism of his central nervous system にも注目しておく必要がある。訳では「自分の中枢神経系のメカニズムを通して」となっており、この一節の訳としてはしかたのないものであろうが、それにしてもこの訳文のこの箇所での中枢神経系とはいかにも唐突な印象である。中枢神経系が登場してくる文脈とこの文章との文脈がどうしてもうまくかみ合わないのだ。

中枢神経系は脳から末梢神経にいたる身体のコントロールをつかさどる人間の社会的身体の要であり、思考を身体に伝えると同時に身体的な経験を脳に伝達するものである。さらに重要なのは、中枢神経系が身体をあたかも反射反応のように環境や情報に適応させる拠点ともなっているという点である。生得的に備わっている反射反応だけではなく、状況にふさわしい行動が特段の思考プロセスを経ることなく瞬時にとれるようになること、言い換えれば、トレーニングによってそのゲームにふさわしい身体になることが中枢神経系のメカニズムに託されている。

ところが、訳書では organize や generalize が個人の知的操作によるものであるかのように「解釈」されているために、中枢神経系のメカニズムという表現と齟齬をきたしてしまうのである。ミードが好んで例にあげるベースボールの場合でも、個人が「一般化された

他者」の態度、すなわちチーム全体の態度を取り入れるのは身体化のプロセスによっている。選手の反応は中枢神経系が肉体を状況に瞬時に適応させるものでなくてはならないが、そうした身体化は各状況における肉体の動きをくりかえしトレーニングすることで達成されるよりほかにない。選手は視覚・聴覚から得られる最小限の情報で肉体に指令を出せるようになるまで肉体の動きを通して中枢神経系をトレーニングしなければならない。そうやって「一般化された他者」が身体化されたとき、ある状況に反応する動きにはチームのすべてのメンバーの動きが埋め込まれた状態になる。

いま1塁上に相手チームの走者がいて、バッターが打席に入ったとしよう。このバッターの打った打球がショートのようにすごい勢いで転がってくる。ショートはこのときの打音で打球の速さ・強さを感じ取り、ボールがバットに当たった瞬間に打球の方向を見定め、捕球のために身体を移動させ、バウンドに身体を合わせてゆく。1塁上に走者がいるという事前の情報によって、ショートが捕球するときの態勢は同時に2塁に送球するための態勢にもなっているだろう。ショートがこのような態勢でボールに向かって行っているとき、セカンドは当然ながら1塁走者をアウトにすべく2塁上でショートからの送球を受ける構えに入っているだろうし、レフトはショートがエラーをしたときに備えて前進してきているはずだ。1塁手はダブルプレーに備えて、かつショートが2塁への送球を諦めて1塁に送球してくるときのためにベースに足をつけて構えている。センターはショートが2塁に暴投したときに備えてポジションをライト寄りに移し、ライトは1塁への暴投に備えて1塁後方にポジションを移しているという具合に、ショートが打球を捕球するというたったひとつの行動にもチーム全体の動きが含まれている。このことは他のメンバーの行動についても同様に言える。ショートはチームの他のメンバーの動きを見て、その意味を考え、総合して何をすべきかを判断するのではない。そんなことをしてはすべてにおいて間に合わず、実際、ゲームとしてもお粗末なものにならざるをえないだろう。

あたかも他のメンバーの動きを見て、その意味を考え、総合して何をすべきかを判断するかのような読み替えはテキストのいたるところに見受けられるが、もっとも単純な例をもうひとつだけあげておく。「ゲームをするときには、かれは多くの役割を組織化しなければならない」（訳書163頁）。この部分の原文は‘In his game he has to have an organization of these roles’であり、ここは「ゲームを遂行するには、この複数の役割が組み込まれた動きを身につけていなければならない」とすべきところであり、「組み込まれた動きを身につけている」と「組織化する」とのでは、「一般化された他者」に対する関係性がまったく異なってくる。

ゲームに参加するとはまずもってそのゲームにとってふさわしい身体を獲得することであり、そうして得られた身体をもとに自分自身を全体のなかに位置づけること、自我はこうして形成されてゆく。社会生活と自我との関係においてもこのことは当てはまり、自我もまた自分の属する社会や集団の成員にふさわしい身体を形成することを通じて高度化が図られるとされている。社会における行為経験が訓練となって、社会にふさわしい身体が形成されるというわけである。ここでいう身体は現代の社会学の領域ではむしろハビトゥスと言い換えたほうがわかりやすいかもしれない。

自我の形成基盤である社会的行為の構成要素となる経験はなによりもまず身体的経験としてある。このことはミードのテキストのPartⅢ The Self、全12章のなかにorganismが、章タイトルを含めて81箇所も使われていることからわかる。このorganismは人間の科学社版では「有機体」と訳されているが、ミードが人間の自我や社会的行為をバクテリアやミトコンドリアなどの有機体レベルから説き起こしているわけではない。青木書店版では「生物体」とか「身体」と訳されており、肉体的存在としての人間を前提に話が進められていることをつかんでいながら、「経験 (experience)」(社会的行為に含まれる経験である)をわざわざ「意識 (experience)」(p.53ほか)と言い換えて、経験の身体性をないことにしているのは、個人の内部に知的な抽象化能力をア prioriに想定してしまったことの帰結であろう。そのため、さらに言えば、社会的行為そのものに関する理解もおかしなものになってしまい、社会的行為があたかも個人に帰属するかのごとくに訳され、論じられてもいるという本末転倒の事態が生じている。

身体はまちがいなくそれぞれの個人に固有なものでありながら、いやおうなく他者に向かって開かれている。身体はまた「内面」の容れ物でありながら、その私密的な「内面」が外部に現れてくるメディアでもある。ミードがジェスチャーをことさらに重要視するのはこのメディアとしての身体に着目していたからにはほかならない。身体そのものについては改めて論じたいと思うが、いずれにしても、ミードの思考にとって不幸な事態となっているのはまちがいない。経験の身体性を無視することが、個人の内部に特殊な知的能力をア prioriに想定して締まったことによるのか、逆に身体性をとらえ損なったことによって特殊な知的能力を個人の内部に想定せざるをえなかったのか、そのいずれとも判じがたいが、この両者が一組の誤謬として分かちがたく結びついていることは疑いない。

4-3 試訳

以上の議論を踏まえて、参考までに4-1で示した原文の試訳を以下に記しておく。

「さて、自我が十分に発達するには一般的に二つの段階があることを指摘したのを覚えているだろうか。第一段階では、個人の自我は他者の特定の態度の集合体だけで構成されているのだった。ここで言う他者の特定の態度とは、他者とともに参加しているある社会的行為の中で、他者が私に向けて示す態度のことであり、また他者同士が向け合う態度のことである。しかし、自我の十分な発達にいたる第二段階にあっては、自我はそうした特定個人の態度の集合体によって構成されているだけではなく、一般化された他者の社会的態度とか個人が所属する社会集団全体としての態度の集合体によってもまた構成されている。この社会的態度や集団的態度は個人の直接的経験の領域に持ち込まれ、自我の枠組みや構成要素として組み込まれる。そのプロセスは特定他者の態度が組み込まれるのと同じである。では個人はどのようにして一般化された他者の態度に到達したり、首尾よく取り入れたりすることができるのだろうか。そのプロセスではすでに取り入れられている特定の他者の態度をいっそう組織的なものにしたり、その結果、より一般化したものにする必要があるが、そのとき頼りにできるのがその特定他者の態度の中に含まれる組織的かつ社会的な性質や意味合いなのである。このように自我が十分な発達をとげるのは、他者の個人的態度を組織的な社会的態度あるいは集団的態度に組み入れることによってであり、そうして社会的・集団的ふるまい（そこには自我も他者もすべて含まれている）の総合的で体系的なパターンと同じパターンを個人の中に再現することによってなのである。そのパターンは組織された集団的態度を媒介として個人の経験の中に全体として入り込み、中枢神経系のメカニズムを通して身体化され、そうして取り入れられた集団的態度でもって人は自分自身に向き合うのである。そのプロセスは他者の個人的態度を取り入れる場合とまったく同じである。」

5. まとめにかえて

パラダイム論で有名な科学史家の T.クーンは、科学者の卵が研究者集団の仲間になるためにはその集団が共有するパラダイムを身につける必要があると言う。身につけるといふのはそのパラダイムの内部の理論をただ知っているだけではダメで、ある現象を目にしたときに集団の他のメンバーと同じゲシュタルトで見ることができなくてはならない。ある公式を身につけているとはその公式を暗記していることではない。自分が目にしている現象にその公式を適用できなければならず、適用できるためには、現象そのものがすでに公式の示しているような現象に見えているのでなくてはならないというのだ。あるパラダイ

ムを身につけるには、こうしたまなざしが自然なものであると感じられるまで研究者仲間とともに訓練を積むしかない。この訓練のための見本となる例のことをクーンは *exemplars* と呼んだ。そしてパラダイムが身についたあとには世界がそれまでとは違って見えるようになるという。パラダイムには多分に身体的な次元が含まれているのである。

このパラダイムの発想は *generalized other* を巡る議論にとっても二重の意味で有用である。ひとつは *generalized other* の態度もまた社会的行為、とりわけ社会的事業にかかわる行為に他者とともに含まれる経験を通して取り入れられる、つまり、身体性の次元を基盤としていること、また、*generalized other* の態度を取り入れた後には社会とその社会に含まれる自分の姿がそれまでとは異なるものとして見えるようになるという性質の共通性から、パラダイムを巡ってなされた議論が *generalized other* を巡っても同様になされる可能性があるという点である。この点は議論内在的な有用性である。

もうひとつはいわば外在的な有用性である。ミードの思索は *generalized other* を含めて一種のパラダイムを提供するものであるが、そのパラダイムの外部から、あるいは異なるパラダイムから眺めて、そのことばだけを移し替えるような手段によってはけっして当のパラダイムの中に身を置くことはできないことを教えてくれる点である。個人の内部に特殊な能力をアプリアリに想定して *generalized other* の議論を組み立てるような転倒したやり方が流通するのは、おそらくは H. ブルーマーの直接的・間接的な影響が大きいのであろうが、ブルーマーの相互作用論はミードの思索とはほとんど何の関係もない。

私たちの認識を根底から揺さぶるような深い地平で展開される理論はそれだけインパクトも大きいのであるが、認識が根底から揺さぶられるためには、そのようなものとして当の理論に接することができるのでなければならず、当の理論が依ってたつパラダイムにすでに足を踏み入れているのでなくてはならない。パラダイムの外部に軸足を置きながら、ことばだけを移し替えて、理論のインパクトを陳腐化する、その一例を *generalized other* に関する通俗的議論は示しているように思われる。

参考文献

- Blumer, H., *Symbolic Interactionism : Perspective and Method*, Prentice Hall, 1969. (後藤将之訳)
「ジョージ・ハーバード・ミードの思想の社会学的意味」『シンボリック 相互作用論——パースペクティブと方法』勁草書房、1991
船津衛『自我の社会理論』恒星社厚生閣、1983
船津衛『ミード自我論の研究』恒星社厚生閣、1989

概念の変形と理論の不幸（山本）

- 船津衛「ミードの自我論」、船津衛編『G. H.ミードの世界——ミード研究の最前線——』恒星社厚生閣、1997
- Kuhn, T.S. *The Structure of Scientific Revolutions*, The University of Chicago Press, 1962. (中山茂訳)
『科学革命の構造』1971
- Mead, G. H. *Mind, Self, & Society -from the Standpoint of a Social Behaviorist.* ed. by Charles W. Morris. The University of Chicago Press, 1962 (originally 1934).
- ミード, G. H. (三隅一成訳)『行動主義心理学』(世界全體主義体系)、白揚社、1941
- ミード, G. H. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳)『精神・自我・社会』青木書店(現代社会学大系)、1973
- ミード, G. H. (河村望訳)『精神・自我・社会』人間の科学社、1995
- 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂、1988
- 日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善、2010
- 大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』弘文堂、2012

* 本稿は2013年度・関西大学研修員制度による研究成果の一部である。

—2016.7.19受稿—